

「現地を訪問して想うこと」

(C コース) 仲 治實

前夜東京で小中校時代の友人達と集い懇親、翌日福島県いわき市へのツアーにおもむき地震当日等並びにその後の厳しい現実を見聞、首都圏と被災地のギャップの凄さを重く感じ一生忘れ得ない記憶となった。とりわけ実家がいわき市豊間海岸前であった校友遠藤雅彦氏(2007 経済卒)の津波等の生々しい震災状況説明それに関わる貴重な生死を分けた体験談に驚愕を覚えショックを受けた。氏の集落近くの小高い丘に鎮座する津守神社がある。氏の談に依ると集落の津波被害からの守護神で平素人々から忘れられていた存在であったとか、今回の津波は御社の際で幸いにも止まった。全国に多くの津守神社が存在し一般に港を守護する神社であると云われている。地震津波に関する歴史的な伝承や古文書等に

残されている記述を無視することが出来ない。一部の研究者を除き現代社会はそれを忘れ日々安全を前提として経済・生産活動に邁進

して来た。氏を初め被災地の校友の皆様から、このツアーを通して「この震災を忘れないでほしい」「自分で見た事を多くの人にはなし伝えて欲しい」とのコメントは心に染み入るものであった。氏の貴重な体験談を取材の上会報“りつめい”の震災特集ページと併せて「立命災害復興支援室発行の災害復興支援室瓦版にリアリティーを込めて掲載し全校友、全学に広く報じ可能なら何らかの形で氏の講演を本学及び校友会として企画しては如何でしょうか。加えて「ハワイアンセンター」在職の三村智春(1985 産社卒)福島校友会幹事長、下山田統括支配人に依る発災から今日迄の歩み及び「アクアマリンふくしま」の責任者に依る被害と復興に関する説明等も会報掲載及び講演の企画としては如何でしょうか。とりわけ三村幹事長に依る「県民の思い・原発事故に依る仮説住宅が存在するいわき市の苦悩」等の内容は深いものがある。

前述の四氏等の貴重な体験を既に企画検討されているでしょうが本学の「歴史都市防災センター」・「立命災害復興支援室(災害復興支援の取り組みー震災関連研究)」に研究材料及び支援に取り上げて頂きたい。

この度の東北応援ツアーは全国の校友が世代横断的に参加する貴重な集いであった。これを期に新たな校友との出会いは素晴らしいが、3.11 発災が為せる業である事は悲しい。中でも阪神淡路大震災に被災し一年弱の避難生活を経験震災復興支援を行ってこられ、今震災ではお身内を亡くされ辛い経験をされた糸田川廣志氏(1972 理工卒)との出会いは印象深い。

合掌